

オンライン学習支援の成果と社会科授業への示唆

筑波大学附属駒場中・高等学校 社会科

小佐野浅子・小貫 篤・早川 和彦
宮崎 大輔・山田 耕太・山本 智也

要約

オンライン授業・オンライン学習支援には様々な形態があり、それぞれに長所・短所や効果的な活用法がある。本稿では、その形態を①同期 - 一方向型、②同期 - 双方向型、③オンデマンド - 一方向型、④オンデマンド - 双方向型に4分類して実践報告をしたうえで、その成果を分析し、これからの授業改善に活かすための示唆を得ることを目指した。オンライン授業・オンライン学習支援の経験は、新たなICTツールの活用によって授業方法を充実させる可能性を拓くだけでなく、従来の授業で見落とされがちだった効果的な学びの諸条件を明らかにするものであった。

キーワード：オンライン授業、オンライン学習支援、ICT

1 はじめに

2020年度は、前年度末から続けて3ヵ月にもわたる臨時休校という前例のない事態からのスタートとなった。対面授業が実施できない期間も、本校ではGoogle Classroom、MeetやZoomなどのICTツールを用いたオンラインによる学習支援を続けてきた。

この間、世間的にも「オンライン授業」という語がにわかに注目を集めたが、それは主にZoomなどのオンライン会議ツールを用いた活動か、動画配信を指しているようだ。しかし、オンラインによる学習支援の方法はそれだけではない。重要なのは生徒の学習意欲を喚起し、効果的な学習を成立させることである。そのために最適な方法は、教科の特性、生徒の個性やニーズ、そして科目に対する教員のポリシーなどをふまえて初めて見えてくる。視点を変えれば、オンラインによる学習支援のあり方を通して、教員の授業観・生徒観をうかがい知ることができ、オンラインでも変わらない／オンラインでは実現できない社会科学習の核心は何かを考察することができるのではないか。そして、そこから得られた知見は、通常授業にも重要な示唆を与えるはずである。これが本稿の仮説であり、研究課題である。

上記の趣旨をふまえ、以下では地理・歴史・公民の3分野にわたる5つの事例を報告する。さらに、それぞれの成果を分析したうえで、社会科授業全般への示

唆を考察する。

2 オンライン授業・学習支援の諸形態

2.1 4つの形態

一口に「オンライン授業」「オンライン学習支援」といっても、その形態には様々なものがある。そして、一般に、各自がイメージする「オンライン授業」の姿が異なっているために、何か議論しようとしても的をとらえられない場面がしばしば見られる。

そこで、まずはオンライン授業・オンライン学習支援の多様な形態を分類・整理する必要がある。本稿では、さしあたり4形態に分類する(表1)。分岐点にするのは、同期(生徒・教員が同じ時間帯にアクセスする)かオンデマンド(生徒が任意のタイミングで利用する)か、単方向(教員からの教材配信で完結する)か双方向(生徒の取り組みに対して教員や他生徒からのフィードバックを伴う)か、という2点である。

表1 オンライン授業・学習支援の4形態

	単方向型	双方向型
同期型	①授業のライブ中継など	②オンライン会議の要領で、生徒の発言を伴う活動
オンデマンド型	③教材や授業動画などを配信	④課題を提出させて、フィードバック

Results of online learning support and suggestions for Social Studies classes.

あらためて、以下に4形態を列記する。

①同期 - 単方向型

たとえば、生徒のいない教室でカメラに向かって授業をし、それをライブ配信（中継）する方法である。ライブなので、授業者と生徒が同じ時間に画面に集まり、その時間のみ視聴できる。

②同期 - 双方向型

たとえば、Zoom や Google Meet などのオンライン会議ツールを用いて、生徒に問いを投げかけ、発言を求めながら展開する方法である。授業者と生徒は同じ時間に画面に集まり、生徒の発言内容に応じてクラスごとに異なる展開がありうる。

③オンデマンド - 単方向型

たとえば、事前収録した講義動画を YouTube 等動画共有サービスで配信したり、講義をテキストファイルにして配信したりする方法である。生徒が任意のタイミングで、くりかえし視聴できる点が①と異なる。

④オンデマンド - 双方向型

たとえば、レポート課題を課して提出させ、評価・コメントを返していく方法である。Google Classroom などの機能を使うことで、生徒間での双方向的なやり取りも可能となる。

2.2 本校の授業で採用した形態

本校では、特定の形態を全教科・全教員に要請することはしなかった。その結果として、教科・科目の特性や教員の個性に応じて、様々な授業・学習支援の形態・方法が開発されていった。

本校社会科では、①同期 - 単方向型の形態を選択した教員はいなかった。このことは、日常の教室での授業が生徒の発言を推進力として展開しているためだと考えられる。カメラの向こうに生徒がいるのにもかかわらず、反応が得られないという形式にメリットを感じなかったのだろう^{【注1】}。実際、同じく同期型でも、②同期 - 双方向型が複数の授業で採用された。

一方、③オンデマンド - 単方向型については、声と板書を届ける動画配信だけでなく、講義をそのまま文字化する形を採る授業もあった。両者はそれぞれ異なる効果を有するものと推測されるため、以下では2事例を報告する。

また、④オンデマンド - 双方向型については、レポート課題による教員 - 生徒の双方向のほか、提出物を生徒間で共有し、生徒 - 生徒の双方向的な学びを促す方法も採られた。これについても、以下で2事例を報告する。

3 同期 - 双方向型の事例

3.1 事例の概要

形式：Google Meet を用いたオンライン授業

対象学年：中3

教科・科目：社会科公民的分野

担当者：山本智也

3.2 方法と教材

以前より、本校では Google の教育用ツールセットである G Suite for Education を利用しており、生徒はその個人アカウントをもっている。学年にもよるが、Gmail などのツールは連絡用に利用頻度が高かった。これをふまえ、オンライン会議ツールは Google Meet を選択した。Gmail と同様 Google の初期画面からクリックのみで利用でき、機能もシンプルでわかりやすい。Google カレンダーや Jamboard（ホワイトボードアプリ）など、他の Google ツールとの連携もスムーズである。ただし、2020年5月～6月の時点では、Zoom にあるブレイクアウト（小グループに分かれて話し合う機能）や挙手などの機能がなかった。しかし、通常授業で小グループに分けずとも盛んに発言することから、ひとまずチャット機能が使えればよいと判断した。

基本的には、教室での対面授業と同様の授業展開を意識した。すなわち、リアルな社会問題を教材化しながら、考えさせる発問を生徒に示し、様々な意見を交わしながら展開していく。このときは憲法学習を中心に進んだが、たとえば当時ちょうど注目を集めていた香川県のネット・ゲーム依存症対策条例を教材化し、「ゲームをする自由は基本的人権か」「憲法は公権力が基本的人権を制約することを認めているか」などの発問をしながら、憲法の基本的な考え方について理解を深めていった。

生徒に発言させる方法として、チャット機能を主に活用した。当初はマイクオンにして発言させることも試したが、限られた時間（30分）の中でタイムロスがあること、そして何より授業のテンポが損なわれることから、チャットを中心に議論する方法に切り替えた。

次頁の図1に、実際の授業場面を示した。画面左方に PowerPoint でスライドを表示し、いま議論している問いや活用したい考え方を意識させる。このスライドが通常教室でいう板書であり、右方のチャット欄では、生徒が次々とコメントを書き込んで、議論を進めていく。その生徒のコメントをふまえて、授業者は切り返しの発問をしたり、補足説明をしたりする。

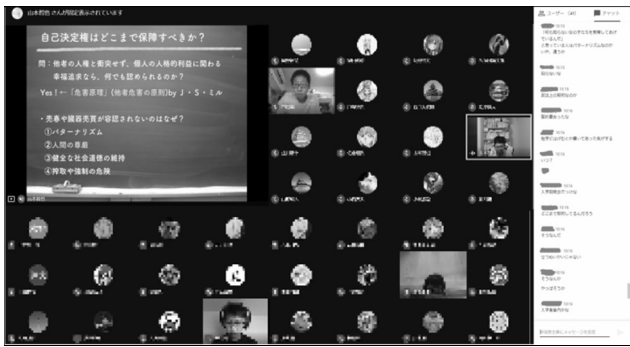


図1 Google Meet での同期 - 双方向型授業の様子

画面に表示されるスライドは教室でいう板書であり、これ以外に授業プリントを Google Classroom で事前配信している。生徒は授業プリントを印刷し、手を動かして書き込むことができる。

さらに、生徒の参加度を高める工夫として、Google Forms を用いたアンケートを活用した。下の図2は、いくつかの事例について、法の下での平等という観点から容認できるか否か、自分の意見に基づいて回答させ、集約したグラフである。チャット欄にフォームへのリンクを貼りつけて回答させ、自動生成したグラフを Google Meet の画面共有機能で共有する。こうすると、ごく短時間で教室内の意見分布が確認でき、大いに議論を刺激することができる。また、次時の導入として他クラスの意見分布を参考として示すと、生徒にとって興味深いようである。

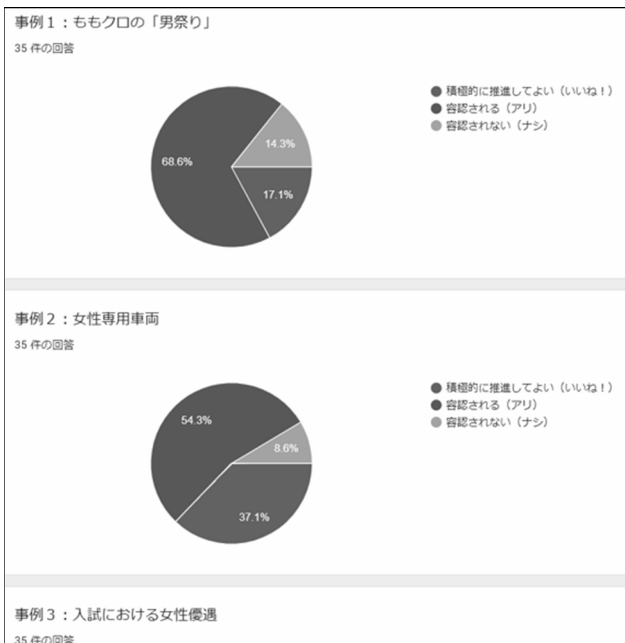


図2 Google Forms を用いて意見分布を集約

3.3 成果と所見

基本的な展開として、教室での授業と大きく変わらないスタイルで進めることができた。発言や提出課題の質から判断するに、生徒の理解度も教室での対面授業と大きく変わらないようである。ただし、それは授業で使用したスライドや資料プリントを Google Classroom に集積した効果かもしれない。

生徒の参加度については、チャット機能により教室では拾いきれない声も拾うことができ、議論において何らかの発言をする生徒の数は教室よりもむしろ多かった印象がある。教室では座席配置などの条件で特定の生徒の発言を拾いがちになることがあるが、チャットでは教室での発言が目立たない生徒もよく書き込む傾向がみられた。また、教室では席の離れた生徒の発言が聴き取りづらいことがあるが、チャットではすべての生徒の発言が等しくクリアになる。このため、前の生徒の発言内容をふまえて議論をつないでいこうとする流れができることもあった。

ただし、しっかりと論理的に詰めた、それゆえに長い発言は、タイピングにも時間がかかり、生徒は授業のテンポに遅れてもどかしく感じられる場合も多いようである (生徒のアンケートより)。そのため、チャットでの議論は、教室に比べると、どうしても論点が深まりにくい印象もあった。この問題点はマイクオンで発言させることである程度は解消できるものの、授業のテンポ感は教室にはほど遠く、進度を確保しようとする議論の時間を確保することが難しかった。

もっとも、思考と発言を授業のテンポに合わせることにに関しては、おそらく通常教室での発話による議論はチャット以上のテンポで進んでいるはずである。オンライン以前に、通常授業の中でも思考のペースが追いつかない生徒も少なくなかったのではないかと想像した。

なお、この形態の実施にはハード面で多くの環境条件がある。たとえば、大画面でチャット欄のコメントの流れを一望できるメイン PC に加え、PowerPoint のスライドショーを展開して画面共有するにはサブ PC が必要である。さらに、手書きをしたい場面がある場合は Jamboard などのホワイトボードアプリをインストールしたタッチペン対応のタブレット端末も要る。これら複数の端末をネット接続するには、無線 LAN (wi-fi) 環境があることは当然の前提となる。そもそも、リアルタイムの音声でやり取りをする以上、雑音の入らない静かな環境がまず必要であるが、そのような場所を見つけるのは意外と難しい。

4 オンデマンド - 単方向型の事例①

4.1 事例の概要

形式：YouTube を用いた動画配信

対象学年：高3

教科・科目：公民・倫理

担当者：山本智也

4.2 方法と教材

対象が高校3年であり、自主学習の材料には事欠かないため、自分のペースで学習を進めさせることを重視してオンデマンド配信を採った。

方法としては、まず講義内容や教材を板書風にまとめた PowerPoint スライドを作成し、スライドごとに講義を録音していく。録音を終わったらビデオとしてエクスポート (mp4 ファイルに変換) する。そして YouTube に「限定公開」(URL を知らないと視聴できない) でアップロードし、Google Classroom に掲示する。こうすると、生徒は Classroom を開いてクリックするだけで講義動画を視聴できる。

教室でカメラに向かって講義するスタイルを採らなかったのは、板書の時間が間延びすること、PowerPoint を用いるにしてもスライドに表示した資料が見にくいことが理由である。生徒を飽きさせないために、教室での授業以上にテンポよく、視覚的にインパクトをもたせながら進める必要があると考えた。生徒の集中力が続くように、動画の長さは20~30分程度とした。また、動画の冒頭などスライドにゆとりがある場合には顔を出し(右下に小さな枠で表示できる)、メリハリをつけるようにした。

特に留意したのは、講義音声を収録する際、ライブ感を大切にすることである。たとえば、原稿を作って読み上げることはせず、アドリブを含め、目の前の生徒に語りかける口調で講義をしていく。これは、動画作成にあたって様々な講義動画を参考にし得た教訓であった。授業者の心理として、くりかえし視聴されるかもしれない動画では、正確な表現で淀みなく話したくなる。しかし、視聴者からすると、原稿を読み上げた音声はきわめて退屈に感じられ、集中力が続かない。生徒への問いかけや多少の雑談なども入れ、いつ視聴しても教室で授業を受けているようなライブ感を得られるスタイルの方が好ましいと判断した。

教材としては、教室での授業と同様に、生徒自身が考える問いにつながる資料を多く用いた。たとえば、ミシェル・フーコーの思想を取り上げる際には、原典

資料や哲学者による対話を提示し、「学校は規律訓練型権力から自由になるべきか？」などの問いを示す。これにより、現実の諸事象や他の思想家の考え方と関連付けながら、学習内容であるフーコーの思想を批判的に吟味することができる。もちろん、動画配信である以上、この問いへの答えが返ってくるわけではない。しかし、動画の中で適宜「ここでいったん再生を止めて、考えてみて」という指示を入れることで、学習内容をインプットする場面と、その内容を自らの頭で吟味する場面を区分し、授業に変化を加えることができる。

4.3 成果と所見

先述のように動画作成にあたってはライブ感を重視したが、表現はなるべく正確に、かつ明解になるよう録り直しを重ねた。この作業を通じて、ふだん教室で授業をしていて、実はあやふやなことばで解説して流してしまっていた箇所が多くあることに気づかされた。動画では、そのような部分をなるべく明解かつ論理的に表現するよう努めたため、講義に限っていえば、一発勝負の教室よりも質の高いものになったと思われる。

また、一般に「倫理」の学習内容はきわめて抽象度が高く、行間の含みが大きい。そもそも問題設定自体が、これまで学習してきた教科・科目とは異質であることも多い。講義にしても、正確で洗練された表現にしようとするほど、濃密な(聞き逃していい部分が少ない)ものになりやすい。このような学習内容に関しては特に、くりかえし視聴できることのメリットがきわめて大きいといえる。生徒のアンケートには、くりかえし解説を聴くことで、聞き流してしまっていたことばまで頭に入ってくるようになり、理解度がかなり深まった、という声が多数見られた。実際、期末考査の成績は例年以上に良く、とりわけ論述・説明問題の解答の質が高かった。

ライブ感を重視した語り口は、予想どおり生徒に好評であった。原稿読み上げに比べて耳から入ってきやすく、事例のイメージや思考を促される様子である。

一方、予想されたことではあるが、完全なオンデマンド - 単方向の形態では、生徒の学習ペースをつくることや、議論による思索の深まりを保障することはできなかったと感じている。講義では、解説を洗練すればするほど、単にわかりやすく飲み込みやすいものになってしまう。これとは逆に、とりわけ「倫理」という科目においては、議論によって様々な考えに触れた異物感から始まる「思索」が重要なのである。

5 オンデマンド - 単方向型の事例②

5.1 事例の概要

形式：講義（テキスト）と確認問題（Google Forms）

対象学年：中1

教科・科目：社会科歴史的分野

担当者：小佐野浅子

5.2 試運転としての4月の学習支援

中1は、一度も登校ができないままオンライン学習支援を始めることになった。当然教員との対面もできず、生徒との交流はメールで自己紹介をするところから4月中旬に始まった。当初はオンラインでの授業がいつまで続くのかという見通しもはっきりしておらず、また、唐突に始まったデジタル生活に対する中1生徒の負担もふまえて、PC画面から離れることのできる課題に取り組みせたいと考えた。そこで、歴史の学習の本題に入る前に、簡単な課題を段階的にこなしていくことで、レポートの様式の基礎を身につけさせようと試みた。

2020年度74期歴史 第1回(4/17配信)
担当:小佐野 浅子

●「歴史」を学んでどんなことだろう?

改めましてこんにちは、74期の皆さんの「歴史」を担当する小佐野(あさの)です。中学社会には、歴史・地理・公民という分野がありますが、筑駒では、中1で歴史(週2)・地理(週2)、中2で歴史(週1)・地理(週2)、中3で公民(週3)と歴史(週1)という時間割になりますので、もしかすると皆さんとは3年間お付き合いいただくことになるかもしれません。まずは1年、どうぞよろしくお願いいたします。

さて、皆さんの手元にはまだ教科書が届いていません。せっかくですので、教科書の写真をとって載せました。これが筑駒で採用している教科書です。A4サイズなのでちょっと大きくて重いです。実際に手に取れる日をお楽しみに!

では、「歴史」ってどんな教科でしょうか?「歴史なんて暗記科目じゃない」「覚えればいいんでしょ、楽勝楽勝」「覚えることばかりでつまらない!そんな人もいますけれども、ですが、この教科書のタイトルは『ともに学ぶ人間の歴史』です。教科書にも、いろいろなタイトルがついています。私たちはどうやら「人間の歴史」を学ぶようです。「ともに学ぶ」とありますから、一人ではありません。誰と一緒に学ぶんでしょう?クラスメイト?それ以外?なぜ「ともに学ぶ」のでしょうか??

こんなことをみなさんと考えながら、進めていきたいと思っています。歴史がとっても好きな人もいます。逆に、まったく興味が持てない人もいます。それでいいと思います。皆さんのスタンスで、肩の力を抜いて、ともに学んでいきましょう。

【本日の課題】

レポートとして提出するための紙を用意してください。A4かB5のレポート用紙が望ましいですが、ルーズリーフでもコピー用紙でも構いません(ただしその場合両面には書かない)。

そして、まずは表紙を作ってください。これが今日の課題です。(中身も決まってるのに!)

次回、解説しますので、まずは自由につくってみてください。

図3 第1回配信の講義テキスト

基本的に文章は話し言葉で、授業を聞くように読め

るよう工夫した。このスタイルが、本格的な授業へ転換したのちも続くことになった。

5.3 授業方法

5月以降本格的な授業が始まると、中1もメール配信からGoogle Classroomを活用した課題配信へと切り替えた。授業は週2回(木・金)だったので、1回は講義(講義を文字起こしした体のテキスト)とGoogle Formsで作成した講義内容に即した5問程度の確認問題を配信し、もう1回を確認問題の解説にあてることとした。生徒の解答をフィードバックして解説を行ったという点では双方向要素も含んでいるが、生徒との個別のやりとりではなく、個人を特定せず任意の意見をとりあげ、全体にフィードバックする方法をとった。

2020年度74期歴史 第5回(5/8配信)
担当:小佐野 浅子

●歴史を学ぶために

第3回配信で皆さんには3人の歴史家のことばを贈りました。ここにもう一度引用してみます。

「歴史は、現在と過去の対話である。」 ……E.H.カー『歴史とは何か』(岩波新書、1962年)
「未来永劫にわたって絶対的な『正史』なんてものは、存在しません。歴史学はつねに変化するダイナミックな営みだし、また、そうでなければならぬからです。」 ……小田中直樹『歴史学ってなんだ?』(PHP新書、2004年)
「歴史を知らない、いまあることは絶対なのです。」 ……鹿野政直『歴史を学ぶこと』(岩波書店、1998年)

これらのことばを覚えるというわけではありません。暗記したらテストで点が取れる?まさかそんなわけありません。むしろ、もう一段階上のことを要求します。皆さんには、これらのことばを理解してほしいということです。ちがいがわかるでしょうか。もちろん今すぐに理解しろ、というわけではありません(それは「わかったつもり」もいけませんし、もうわかったと言われたら私の仕事がありません)。

歴史の授業を通じて、実感できるようにしてほしいということです。

ちなみに皆さんは辞書で「歴史」って引いたことありますか?「歴史」の辞書的な意味を説明できるでしょうか?ここでは辞書を引くというアクションはささみたくありません。ぜひ、皆さんがご自身の辞書で調べてみてください。(ウェブでググって終わり、電子辞書でババっと終わり、ではなくぜひ紙の辞書をめくってみよう!)

さて、皆さんの辞書には何て書いてありましたか。私は、せっかくなので皆さんにもこの国語辞典を紹介したいと思います。『日本国語大辞典』という、日本最大規模の国語辞典です。ジャパンナレッジにも収録されているので、実は皆さんも図書館を通じてオンライン版を使ってみることができます。筑駒の図書館には実物があります。辞書ですから借りることはできませんが、登校したら手に取ってほしい本の1冊です。というか、1冊ではありません。現在手に取ることができる第二版は全13巻+別巻からなっています。もしかしら皆さんのお家に立派な書庫があるならば、ひっそりとたたずんでいるかもしれません(我が家にはありません)。1960年代に編纂事業が始まり、1972年から1976年の5年間にわたって刊行されました。国語辞典が5年かけて刊行されるって、刊行途中だったら、たとえば「ま行」以降は調べることができない、とかなかなか想像できません。ものすごい事業です。その『日本国語大辞典』にも当然「歴史」という項目があります。

日本一の国語辞典にはいったいなんて書いてあるのか……。

図4 本格授業開始後の講義テキスト(一部)

講義テキストは計22回配信したが、1回につき4,000~8,000字程度(A4で3~5枚程度)の分量であった。アンケートでテキストに対する意見・感想を自由に書いてもらったところ、「苦にならずに読めました」「長文なので読むのは、大変ですがその分内容が面白く、やりがいがあるので続けてほしいです」「ちょっと大変ですが頑張ってます」といった意見が多かったが、その一方で「内容はいいと思うが、あま

りにも長すぎると読むのが大変になる。まだここまでは許容範囲です」他の人はどうか分かりませんが、短く簡潔にまとめたほうがいいと思います。自分は長文を読むのが苦手なので」といった率直な意見も寄せられた。

講義テキストと同時に Google Forms で作成した確認問題を配信した。内容は、①簡単な確認問題（単語で解答できるものか選択問題）2～3問、②論述を求める思考問題、③講義テキストの中で「へえ」と思ったこと、印象的だったこと、④感想・質問、から成る。

【確認問題①】正しくないものを選び。*

- ナイル川は毎年冬に規則的な氾濫を起こし、耕作地の再生には莫大な労力がかかっていた。
- アスワンハイダムが建設され、上流から流れ着く栄養分などが均等化したため土壌がやせてしまった。
- 古代エジプトの神聖文字は、シャムポリオンによって19世紀に解読された。
- 古代エジプトの人々は、太陽の動きをもとに1年が365日になる太陽暦をつくった。

【確認問題②】古代エジプトの王（ファラオ）が神そのものであるという考え方はなぜ生まれたのか説明しなさい。*

回答を入力

【思考問題】あなたはエジプト文明をどのように評価しますか？*

回答を入力

【次回予告？】インダス文明について知っているあるいは聞いたことがある事項を挙げてください。（調べの必要はありません）

回答を入力

【次回予告??】中国文明について知っているあるいは聞いたことがある事項を挙げてください。（上同様調べて書く必要はありません）

回答を入力

図5 Google Forms で作成した確認問題

講義テキストと同時に配信したため、問題のほうに先に目を通してからテキストを読むといった手順を取る生徒もいた。こちらからは特に指定せず、各自自分に合ったやり方を選ぶことができた。

生徒の解答は、スプレッドシートに出力することが可能なので、個人の提出状況や全体の解答傾向などを簡単に把握することができる点は非常に便利である。

集まった解答をもとに、解説テキストを配信した。Google Forms で課題を作成した場合、解答を埋め込むこともできる。短答式の問題であればその機能も有効だが、思考問題（論述）では特に正答を用意しているわけではないので（しかも論述がかなりの部分で一致しないと不正解判定となってしまう）、今回はその機能は使わず、生徒たちの解答を引用紹介しつつ解説を

加えることとした。場合によっては講義テキストよりも長文になったが、生徒の誤解も可視化できた点良かった。また、感想・質問として書き込まれた雑談のようなものもいくつかとりあげてコメントを付したところ、思っていた以上に生徒たちの反応が良かったので継続した。生徒の解答の文章量は増加傾向にあり、対面授業ができない中で、生徒たちがお互いを知る機会の一つとして機能していたのかもしれない。

なお、生徒の解答を見る限り、講義テキストを読んでもその場で提出を済ませる生徒が多かったようだが、中には自分なりに調べた内容をふまえより深い学びに発展させている生徒も見られた。そうした解答は解説の際にも大きな手助けとなった。

(2) 古代エジプトの王（ファラオ）が神そのものであるという考え方はなぜ生まれたのか？
概ねみなさんの言及する通りです。わかりやすく表現できている回答を例として挙げておきます。

- ・エジプトの自然を代表するナイル川がとても穏やかで、かつ規則的に増水したのでその規則を用いて王が川の管理をしていた。しかし、規則を知らない人から見れば王は自然さえもコントロールする神のように見えたから。
- ・ナイル川の増水期や水が引く時期の規則性に関する知識を独占していたため、人々の目には自然をもコントロールする偉大な王が神のように映ったため。
- ・ナイル川の規則的な変化に気づいた人がその知識を独占しナイル川の変化を予想することで規則性に気づいていない人たちからみてナイル川を操る神のように見えるようにしたから。
- ・ファラオが川の水位や透明度などの知識を独占したうえで川の氾濫時期を予測し、あてることができていたことに加え、ナイル川の氾濫は緩やかで、大きな被害を出すことはなく、むしろ豊かな土を運んできたため、民衆に河を操っているかのように感じられたから。

ポイントは「王が自然をコントロールしているかのように見えた(見せた)から」という点です。ナイルの規則性が王を神たらしめたとも言えますね。

(3) 【思考問題】あなたはエジプト文明をどのように評価しますか？
3000年を安定とみるか、停滞とみるか、そのあたりの率直な意見を出してくれていましたね。いくつか紹介します。

- ・確かに新たな知識を文明中に作り出さなかったけれど、ナイル川という自然の確固たる規則性を見出している時点で凄いことであり、また、確固たる規則性に乗り続けるとい選択をしたことで、多くの農民たちも安心した暮らしを送れたらうから、民衆にとってとても良い文明であったと評価します。（民衆目線での評価ができるのはとてもいいと思います）
- ・新しい技術が生まれたりするのは、なにか困ったことがあるからだと思うので、3000年も変化しなかったのは、大きな困った事がなかったという事だと思ふ。なので良い文明だったと思う。（誰かに危機が人々を進歩させてきた背景には多くの犠牲もあるもんね）
- ・僕はエジプトは思考停止していた訳ではないと思います。なぜなら、エ現代にもつながる文化などが発達していました。例えば、あの時代に、クフ王のピラミッドのような高度なものを作るのは驚かされます（どこかで読んだ気がするのですが、現代の技術でもアレを作るのは困難だそうです）。さらに、エジプトの「リンド・パピルス」には確か最古の方程式だとされている「Aha」を使った方程式や連立方程式が書かれており、高度な方程式を扱っていたことがわかるため、「思考停止」どころか、その余裕を生かして高度な技術・文化を生み出していた優れた文明だと評価します。（ピラミッドは高度な技術とは無縁の単純なものをひたすら積み上げて作った大いなるマンパワーの産物、と位置づける研究者もいるようです。評価って難しい）
- ・土地の運が良かっただけだと思った。しかし素晴らしい技術もあるので悪くないと思った。でも3000年も時間があつたの今のレベルではなくともある程度は新しい技術を生み出して欲しかった。（運は確かにあるね。その運を存分に生かすことができたのはすごい）
- ・3000年も、変化をほとんどすることなく続いたため、それだけ合理的な社会の仕組み・考え方だったのではないかと考えられるため、高く評価する。しかし、この考え方はナイル川沿いのエジプトでしか通用しない、普遍的ではない文明のため、多角的に見れば欠点だらけである。一方で、その土地の気候風土に適した文明のため、当時の知恵が詰まった文明であることには間違いないと思う。（非常に鋭く広い視野からの評価ですね！）

2 / 6

図6 確認問題の解説テキスト

5.4 成果と所見

講義をそのまま文字起こしする形でのテキスト配信となったため、文字情報が非常に多くなったことは間違いない。だが、これは、単に必要な情報だけでなく、対面の授業中にするような雑談も盛り込んだり、時事的な歴史に関するニュースにも触れたりすることで、教室で授業を受ける際の臨場感をなるべく再現できる

ように努めたためでもある。これについては一定の効果があったと思うが、本を読むことに慣れた生徒が多いことに非常に助けられた。だが、中には長い文章を読むことを苦手としている生徒もおり、今回そのことに自由記述欄で気づかされた。翻ってみれば、対面授業のように、音声から入ってくる情報を整理する形式を苦手とする生徒もいるはずだが、それをこれまではあまり確認してこなかった。生徒に対する様々な支援のあり方を考える機会となったので、今後の授業の中でも活用していきたい。

Google Classroom での授業資料のアーカイブス化はプリント等の整理が得意でない生徒にとっても大きな助けとなった。そのため、2学期以降、対面授業が開始したのちも資料共有の場としての活用を継続している。

また、講義の文字起こしをする過程で、言葉の一つ一つを実は曖昧なまま説明していたことにも気づかされた。より正確な叙述をするための情報の精査は、対面授業をしていた時よりもはるかに多くなったが、自身の学びにもつながった。

さらに、教室では時間や流れの関係で拾いきれない生徒の疑問や、発言そのものできない生徒もいるが、文字を通じてならば、それらを丁寧に拾い上げることができたのも大きな収穫だった。こちらの意図が正確に伝わっていなかったりすることを、解説を通じて丁寧に届けることができたという点でも、オンデマンドならではの利点を生かせたのではないかと思う。

最後に、夏休みの宿題として、1学期の学習内容を使って、選択式の正誤問題を作成するという課題を出した。作問だけでなく、解説と出題のねらいも説明させた。これら生徒たちによる作問を、事前にスプレッドシートに出力したもの（作問者名は非表示）を共有し、2学期の期末考査に出題した。問題の質は千差万別だったと言わざるをえないが、生徒たちの間で出題予想がなされたり、出題者予想がなされたりと、思っていたよりも盛り上がった。2学期の試験範囲外ではあったが、取り組む姿勢も比較的ポジティブなものであった。生徒の解答をもとにした問題解説にせよ、生徒作問による出題にせよ、生徒が他の生徒たちの考えから学ぶということを非常に楽しんで受け入れているということが実感できた。こうした学習効果を得られる活動は、今後も活用していきたい。

生徒たちと主に文字を通じた交流を続けた授業となったが、教員にとっても、生徒の声が見えることでモチベーション維持に一役買ったことは間違いない。

6 オンデマンド - 双方向型の事例①

6.1 事例の概要

形式：Google Classroom を用いたレポート課題

対象学年：高1

教科・科目：地理歴史・地理A

担当者：宮崎大輔

6.2 課題設定の背景

新型コロナウイルスの感染拡大による緊急事態宣言が出されたことにより、2020年度は、年度当初の4月から生徒が登校できない日々が続いた。学校全体でオンラインによる授業の環境整備が進む中、どのような学びを用意するかについて個人的に検討した結果、高校1年生の地理A授業において、レポート課題を出すことにした。

高校1年生（本校71期生）は、私が中学1年時から担任をしていた学年で、中学時も社会科の地理的分野を受け持ってきた。原発問題や水俣、沖縄の基地問題などのテーマを中心として学ぶ中で、日本の社会が置かれている現状や構造を理解することを目標に授業を行ってきた。

2月からの感染拡大が続く中で、日本社会にはネットを中心に、コロナに関するさまざまな言説が数多くみられるようになった。科学的・専門的なものから根拠が薄弱な記事まで、玉石混淆の情報があふれていた。コロナに関する言説をつぶさに見て自分の論を組み立てる作業は、中学時代から培ってきた学びの方向性に合致するものであり、とても良いチャンスであると感じた。そこで、今回の課題を設定することにした。

6.3 課題の概要

・課題の発出 4月20日 締切 5月6日

自宅学習の期間ではあったが、連休明けを提出の締め切りにするようにした。発出から締め切りまでは二週間と少ししかないので、今思えばもう少し長くてもよかったと感じる。

・テーマ 「新型コロナウイルスの感染拡大を通じて見えてきた、日本と他国の違いについて」

地理の課題なので、日本と他国（地域）の比較をさせることにした。ただ全体の分量制限もあり、あまり数多くの比較対象国をあげると論旨が散漫になる可能性があるため、一つか二つに絞るような指示を出した。

・分量 2000字程度

採点が大変ということもあるが、原稿用紙5枚程度

で簡潔にまとめる、という作業も大切と考えており、この字数を設定した。

・文献の明示

メインとなる文献を一つ、明示させることにした。これは書籍でも学術論文でもネットの記事でも可とした。ただ、「どのような文献を選んだのか」についても評価に加えることを伝えておいたため、その文献の信憑性に対して十分に吟味した様子がうかがえた。

・論点・テーマ

これは、自分の興味に応じて自由に選ばせた。例として医学・疫学・統計学・理学・薬学・歴史学・法学・経済学・地理学・社会学・政治学をあげておいた。今思うと「～学」はやや大袈裟に過ぎ、「分野」程度の表現が適切だったと感じている。

6.4 レポートの例

ここでは、いくつかの目についた特徴的なレポートを紹介してみたい。

・「日本がフェイクニュースに踊らされないためには」

「トイレトペーパーが無くなる」や「4月1日からロックダウン」など、悪質なデマが流れた状況を憂い、フェイクニュース対策の現状をアメリカとの比較において考察したものである。デマ拡散の過程についてマサチューセッツ工科大学の研究に触れ、拡散のスピードの速さや SNS ユーザーの同質性について指摘し、必ずしも悪意によるものではない拡散の過程が認識できた。目指すべき方向性としては、教育によるメディアリテラシーの獲得やファクトチェックの充実など、妥当なものとなっている。

・「数理疫学の立場から見る日本とスウェーデンのコロナウイルス対策の違い」(図7)

これは、上図の様に 1930 年ごろの基本的な数理疫学の成果を用いて、日本とスウェーデンの今後の感染者数や致死率の推計をしたものである。個人的にはこの分野に関する指導はできないため、数学科など他教員との連携が可能な部分であると思われる。

数理疫学の立場から見る日本とスウェーデンのコロナウイルス対策の違い
2020.05.06/71期

今回、僕はスウェーデンの新型コロナウイルス対策と日本のコロナウイルス対策の違いについて調べようと思った。それは、スウェーデンが「規制がとてもしない」というほかの国にはない対策をしているからだ。

小中学生は普通に登校し、飲食店・理髪店は開店している。“Large Event”は禁止しているものの、街には人が行き交っている。集団免疫は、現状では COVID-19 に効果はないとする見解が有力だが(記事 1 参照)、それでは、なぜこのような対策をとることになったのだろうか。

スウェーデン当局は、集団免疫戦略を採用していないとの立場だ。カロリンスカ研究所のヤン・アルベルト教授は、ロックダウンをしても感染者数はゼロにはできない上、医療体制の限界を超えていないので、感染を遅らせるメリットがないという(記事 2 参照)。政府も、おそらくその立場だろう。とすれば、その論理には穴があるとぼくは考えた。果たして本当に、感染を遅らせるメリットはないのか、考察していく。

1. 感染者密度と致死率

左の図は、記事 3 をもとに、各国⁴もしくは日本の各地方⁴の、人口・面積に対する感染者数の割合(α軸)と致死率(β軸)の相関を計算して調べたものである。多少のばらつきを除けば、正の相関は確認できる(4つめのグラフを除き、線形近似におけるαの係数は正)。左の図では、黒線近似をしている。つまり、αが2倍になったとき、致死率はどのように変化するか。結果は(図の順に)1.23, 1.17, 1.41, 1.08 となった。ここでは 1.2 (≒ 2^{0.287}) という値を採用することにした。

例) 総人口・面積が等しいモデル A, B を考える。
A: 1週目 10人感染、2週目 10人感染。
B: 1週目 20人感染、2週目 0人感染。

このとき、Bの死亡者数はAの0.6倍くらい。

しかし、これだけではスウェーデンの方法が良いことの証明にはならない。なぜなら、これは「最終的にかかる感染者数が等しい」前提のもとに成り立つからだ。

そこで、次章では、実際のスウェーデンと日本の感染拡大の様子から、1930年頃の、基本的で原始的な数理疫学の成果を用いて、今後の感染拡大の様子を推計していく(資料 1, 2 を参考にした)。

2. 感染者の動向と致死率の関係

以下の計算では、①感受性人口が増えないワクチンなどによる感染者数の抑え込みが期待できないという 2 つの仮定に基づいている。

さて、左は 2 月終わりのスウェーデンでのアクティブな感染者(隔離されていない感染者数の和)のグラフである(グラフ内では ϵ が x と書かれている)。このグラフでは、マルサス係数 $\beta S(0) - \gamma = 0.4626$ となっている⁵(実際は、発症率の逆数倍をしなくてはならないが、ほとんど定数であると仮定すれば、 $\beta S(0) - \gamma$ の値に影響はない)。1 / γ = (平均感染性期間)であり、基本的に、感染した人はすぐに感染性を持ち、発症した人はすぐに隔離されるものとすれば、1 / γ = (潜伏期間)約 5 日となる(資料 3 参照)。このときに、基本再生産数 R_0 は 3.3130 となる。

次のグラフは、日本の、1 月下旬から 3 月初めにかけてのアクティブな感染者数を示している。同様計算すれば、 $R_0 = 1.6320$ となる。

さて、問題は感染者密度の違いだ。資料 4 を参照する。資料 4 ではインフルエンザの例が出ているが、使われているモデルは同じ(SIRモデル)であるから、そのまま適用できる。日本は、3 月に海外出入国要請を出すことで人同士の接触を減らしてきた。もちろんスウェーデンもそうしているはずだが、日本ほど影響は大きくない。そこで、スウェーデンでは再生産数 R_0 に 0.9 を、日本では 0.7 をかけて、アクティブな感染者数のグラフの概形違いを見る。ただし、 R_0 を変えても、各軸方向への偏位と平行移動を除けばグラフの概形にはないと仮定する*。スウェーデンの場合は、ピークは 0.30 (日本の 37 倍)、最終規模は 0.94 (日本の 3.9 倍)、日本の場合は、ピークは 0.0081、最終規模は 0.24 となった(サイト 1 を利用)。スウェーデンの死亡率は、日本の 5 倍⁶となりそうなことがわかった。

この式や、これ以降出てくる式における各変数の意味をまとめておく。詳細は資料 2 を参照。
 ϵ : 実行り始めるからの時間、 S : 感受性のある人口、 I : 感染者数、 β : 感染率、 γ : 隔離率・死亡率・回復率、 $\rho = 1/\gamma = (1 - \beta I_0) / \beta I_0$ 。
⁶ (感染者密度による死亡率の上昇率) × (人口密度の違いによる死亡率の違い) = $3.9437^{0.287} \times 0.285 \times 0.0079^{0.287} = 5$

図7 生徒のレポート例①

・「新型コロナウイルスの感染拡大を通じて見えてきた、日本とイギリスの違いについて」(図8)

新型コロナウイルスの感染拡大を通じて見えてきた、日本とグレートブリテン及び北アイルランド連合王国の違いについて

僕が日本との比較対象に選んだのはイギリスである。イギリスと日本は同じ島国というだけでなく、基本的な行政構造や国民性について類似点が見られる。こういった共通点にもかかわらず、それぞれがこの度の危機に対して異なる性格を見せているの面白く思ひ比較検討することにした。

論点は「距離」である。

特に政治家と国民の距離、人同士の距離、そして人と自然の距離の3つに注目した。どの学術分野になるかは判断しづらいが、前2つが政治・社会学、最後のは人文地理学に含まれると思う。

なお、僕は基本的に日本という国があまり好きになれないので時々当たりが強くなる時もあるが、予めご了承いただきたい。

1. 政治家と国民の距離

この度の一連のコロナ騒動の中で僕が(そしておそらく多くのイギリス国民も)最も感動したことの一つが、ボリス・ジョンソン英首相の退院後のビデオメッセージである。僕はこの演説の中で“Thank you”というフレーズを8回も発した上に看護婦を名指しして感謝を伝えている。ジョンソン首相といえば皮肉を含ませた発言が印象強かったが、だからこそ首脳見せない一面が誠実に聞こえたのだろう。そして彼は“NHSに感謝し、協力しよう”(意訳)と述べている。

これこそ一國の長のありべき姿だと僕は思った。危機を共にし(もちろん感染してしまったのは意図的ではないが)、自らの心内を発信・共有する。見ていて共感と信頼感が尽きない。こうした人を惹きつける力こそがより指導者の素質であると痛感した。それに対し、我が国の首相閣下は上記のような力強さと求心力に欠けているような気がする。以前からの問題点を別にしても、マスクに拘泥したり60リギリまで緊急事態宣言延長を見送ったりとどこか頼りない。日本の政治家全体を見て、英国首相のような人物は今の日本に見当たらない(いたらごめんなさい)。

これらのことからまず1つ、政治家と国民の距離というのが日本に比べてイギリスは遙かに近いと感じた。

2. 人々の距離

次に触れたいのがイギリスから報じられる数々の“イイ話”である。

例えば、99歳の退役軍人が100歳までに自宅の庭を100倍復すことを目標としてNHSへの寄付金を募ったり、それに対して保健相自ら会見で感謝を伝えたことは有名だ。対照的に、明らかに入ってくる情報は日本のもののほうが多いはずなのにこの手の話はほぼ聞かない。むしろ新聞ではDVやネット上での愛さずらしなど、心無い行動が多く報じられている。

よく、個人主義の欧米に対し集団主義の日本という位置づけを耳にする。自己を大切にする西洋文化と、全体を優先する日本文化の違いを表現したものだ。けれどこれらの報道から見えるのは、危機に際して「団結する個人」と「分断された集団」という構図

図8は高校入学生が書いたものである。「距離」をキーワードに政治と社会、人同士、人と自然のそれぞれの関係に着目し、イギリスと日本の社会の違いを論じている。地理や地理学にも興味を持っており、都市構造や景観の概念についてもすでに理解できている。

これら以外では、台湾や韓国、中国などと比較して日本でPCR検査の拡大が進まない現状を憂いているものが多かった。科学的に検査の拡大が必要であることは明らかであるのになぜ進まないのか、生徒たちは大いに考えたであろうと思われる。

6.5 Google classroom 利用のメリット

・添削が容易(図9)



図9 添削の事例

条件として「ドキュメント」ファイルでの提出を課せば、「提案モード」を使った添削が簡単にできる。簡単な誤字脱字や改行から、表現の変更や再提出も含め、とても短時間で効率よくやり取りできる。コメントも丁寧につけ、その反応を見ることで、自主学習期間の生徒の状況把握もできるという副産物もあった。

・点数化、一覧に便利

レポートに点数をつけることが可能で、点数による並び替えをすることもできる。一覧することで未提出者は誰かも簡単に把握できる。

Google Classroomに限らないが、ウェブによるやり取りのデメリットは、読む際にとても疲れると感じることである。紙で読むよりも大きな疲れを感じた。一日に読める本数も限られるため、計画的に読んでいくことが必要であると思われる。

ただ、紙に印刷する必要がなく、やり取りが簡単、採点・一覧できるなどのメリットはとても大きいため、活用する意義は十分にあると感じている。今後のさらなる感染症の流行も懸念されている現状において、自宅学習期間を乗り越えるための重要なツールになると考えている。

である。人と人との物理的距離は離れつつ、心理的距離は近づいていくというイギリスの風潮は素晴らしいと思った。

また、キリスト教の影響も考えられる。聖書には「あなたの神を愛するようにあなたの隣人を愛しなさい」という句があるように、相互扶助の精神が重視されている。

このような考え方がヨーロッパに根付いていることも1つの要因だろう。

心理学のことはよくわからないが、パンデミックという危機を通じて今までとは異なる国民性が現れているのは興味深いと思った。これが目的である。(無論、どちらの国にも様々な側面がある。これはただの一般論である。)

3. 人と自然の距離

次に、両国のロックダウン(日本ならば外出自粛)後の生活という点からそれぞれの都市構造(特に人口が多い都市)の違いを論じていきたい。

在英の人々の話を読んでみると、ジョギングが全国を通して人気であることや、ジョギング中にソーシャル・ディスタンスを守りつつ人と会話する、という記述が見られた。日本に当てはめて考えると、路上でメートルも空けて喋っていたら邪魔だし、そもそも2メートルも取れるのかという疑問が生じた。

そこで上空から日英両方の都市を見比べてみると(ロンドンと東京)、まず思ったのは目に入る緑の数が全然違うことだ。東京で大きな公園といえば皇居・新宿御苑・代々木公園くらいで、周りの灰色のエリアと比べてなんとも寂しい。一方ロンドンの方は中心部だけを取ってみてもグリーンパーク・リージェンツパーク・パターニーパーク・ハイドパーク・セントジェームズパーク等意外に自然が身近にあることが分かる。よく見ると他にも小さな公園のようなものが通りの隙間の至るところにあることが分かる。(メイン文庫の図2を参照)

これはガーデン・スクエアと呼ばれる共有の庭園広場である。ガーデン・スクエアは18世紀に個人所有の土地で始まり現在は一般に開放されているものも多い。ガーデン・スクエアの意義は都市の中心に住んでいながら庭も同然の緑地を得られるということだ。建物とガーデン・スクエアは道路1本で隔られているだけである。

ガーデン・スクエアは平時でも十分有り難い存在だが、このコロナ危機を通じてより価値が高まっている。遠出が制限されている中でこのような自然が10メートルも離れていないところにあるという事実

は、相当心の負担を軽くするに違いない。

このような自然の空間との距離が近いことが心理的な余裕をもたらし、それが寛容さを生み、上述のような人と人との距離を近くすることにもつながる。都市の中の緑地は単なる憩めではなく、都市というある意味異常な環境に身を置く人間にとって平安に暮らすためになくてはならないものだと考えた次第である。

図8 生徒のレポート例②

7 オンデマンド - 双方向型の事例①

7.1 事例の概要

形式：Google Classroom の質問機能を用いた小課題

対象学年：中3

教科・科目：社会科公民的分野

担当者：山本智也

7.2 方法と教材

休校措置の継続が決まった4月の時点では、家庭の側にも学校の側にも、同期型授業を進める環境条件が整っていないことが多かった。そのような状況下では、スマートフォン1台だけでも参加でき、時間と場所を制約しすぎず、通信量の負荷が大きくない方法でオンライン学習支援を進める必要があった。

そこで4月の初期段階でまず活用したのが Google Classroom の「質問」機能であった。第6節に示した「課題」機能が Google ドキュメントなどのファイルを提出するものであるのに対して、「質問」は Classroom 内の入力欄から直接文章を入力する。つまり、PCなどで新たにファイルを作成する必要はなく、スマートフォンでメールに返信するような感覚で文章を入力すればよい。これなら、自由に使えるPCが手元にない生徒でも取り組むことができると考えた。

また、「質問」機能にはもう一つ、「課題」とは異なる特徴がある。それは、Classroomに参加している生徒間で、全員が提出した回答内容を一覧できることである。さらに特定の生徒の提出物に対して生徒がコメントをすることも可能である。つまり、提出した文章を読み比べたり、相互批評したりすることができるのである。この設定は教師のみが可能であり、公開したくない生徒には「限定公開のコメント」機能で提出させる配慮をすればよい。ふだんの授業場面でも、生徒にとって他の生徒の意見に刺激を受け、優れた分析や考察に対してリスペクトする文化はきわめて重要なものである。それをオンライン上で実現するための方策として、この形態が適していると判断した。

生徒の視点を想像すれば、課題を出してから教員からのフィードバックが来るまでの間は、学習のモチベーションを削ぐのに十分なほどには長い。教員からすれば100名以上の提出物に公平な評価・コメントを加えるのは実にたいへんな作業であり、それなりに時間がかかるのは当然なのだが、生徒からその姿は想像しがたいだろう。「しっかり読んでもらえているのだろうか」「点数と一言コメントだけ返ってきて、自分の頑

張りに対して物足りない」という気持ちになる生徒もいるものと思われる。生徒が課題を提出してから教員によるフィードバックを得るまでに、何か学習の刺激になる仕掛けがあるとよい。「質問」機能によって互いの回答を見ることは、異なる視点や考えに触れて興味・関心を喚起するだけでなく、「他の人にしっかり届いている」という感覚を与えることにもつながるのではないだろうか。

「質問」機能で提示した小課題の内容は次のとおりである。

課題① 感染拡大防止と個人情報

：感染者の情報を公開することはどこまで認めてよいか？

課題② インフォデミック

：気になった報道・記事・投稿の例を挙げ、なぜ「気になった」のか説明せよ。

課題③ 選別主義と普遍主義

：減収世帯に30万円か、全員一律10万円か？

課題④ トイレトペーパー買い占めとゲーム理論

：望ましい均衡に至るには誰が何をすればいいか？

課題⑤ 危機と独裁

：危機において権利への制約を伴う施策をどのように意思決定すべきか？

課題⑥ 教育政策の案を検討する

：9月入学・9月始業の是非について論じた記事を紹介してコメントを加えよ。

いずれもコロナ危機を中心とした時事的なトピックに対して社会科公民的分野の観点から迫るものである。概念や理論をふまえた緻密な考察を要する課題と、調べれば何かしら書ける課題とを交互に出していくように意識した。

各課題にはA4で1枚程度の解説文を付けた。たとえば、課題⑤の場合は次のような内容である。

緊急事態宣言が出される前、それに慎重になる理由として政府からも挙がっていたのは「私権の制限を伴う」ということでした。もっとも、宣言の発出後も、その制限の多くは「自粛の要請」レベルにとどまることはみなさんご存じのとおりです。これに対して、公衆衛生の専門家からも「ロックダウン（都市封鎖）」を求める意見が出ていることも知っていますね。海外では、外出した国民を警官が棒で殴打する（まるで大晦日の某番組のような……）など、権力をむき出しにした強力な統制も見られます。一般市民の中にも、「非常

事態なのだから、民主主義はいったん忘れよう」などの声があり、いくつもの国で政治リーダーの独裁を強める動きがあります。

ここで、「危機」における権利制限と権力集中(独裁)について、歴史的な事例をみてみましょう。

①古代ローマでは共和政(⇔帝政など君主政)期に「独裁官(ディクタトル)」という官職がありました。国家の非常事態にのみ置かれ、1人の人間に広範な分野で強大な権限を与えるものです。ただし、任期は半年程度と決まっており、任期後にはその業績が厳しく検証されました。

②第一次世界大戦後にドイツで生まれたヴァイマル憲法では、その48条2項で緊急事態条項がおかれていました。非常時には「公共の安全と秩序の回復」を目的に大統領が武力行使を含む措置を決定し、国民の権利(人身の自由、表現の自由、集会・結社の自由、財産権など)の「全部または一部を停止することができる」と定めるものです。ヒトラーは、この条項に基づいて大統領令を公布させ、国民の基本的人権を「当分の間」停止するとしました。しかし、実際にはこの状態が終戦まで続きました。緊急事態条項に基づく措置は議会の要求があれば廃止されると憲法に定められていましたが、1933年の全権委任法でナチス政府の法律が憲法に優越することになり、ヴァイマル憲法は事実上失効していたのです。

このように、「危機」の状況における政治権力のあり方については、その濫用の可能性も含めて難しい面があります。非常事態への対処のためには「独裁」(国民の権利制限を含む広範かつ強大な権限をリーダーに委ねること)を認めるべきでしょうか? そうだとするならば、私たちは歴史的な事例から何を学ぶべきでしょうか?

課題: COVID-19による「危機」において、権利への制約を伴う施策(休校や休業、外出禁止など)をどのように意思決定し、実行すべきか。課題の文章をふまえて、特に「独裁」の是非を検討し、あなたの考えを述べてください。

*まず、休校要請や緊急事態宣言などの決定が、現にどのような人・機関によって行われているのか、意思決定のしくみやプロセスを把握しましょう。

*歴史的な「危機」には、戦争、内乱、テロ、疫病、自然災害などさまざまな種類があります。それぞれの性質の違いも考慮するとよいでしょう。

*日本では、東日本大震災を機に、「非常事態に政治リーダーが指導力を発揮する」ために憲法を改正して緊急事態条項を設けよう、という主張がみられます。その議論も参考になるでしょう。

7.3 成果と所見

5月の連休以降も登校できない状況が続き、第2節に示したオンライン授業(同期-双方向型)へと移行したため、この形態を採っていた4月において生徒がどのように取り組んでいたかは提出物の内容とアンケートからうかがい知るほかない。

まず提出物の内容をみると、どの課題に対しても教員が求めていた及第点のレベル以上のものが目立った。「朝日けんさくくん」など情報ツールの利用を促したためか、提示した課題文を読むだけでなく、自分なりに事例を調べて論拠にしたものや、論理を緻密につめて小論文のような形式にしたものも少なくない。取り組んだ本人にとっては高い学習効果があったものと推測される。

その反面、これらの小課題がもはや「質問」のニュアンスを超え、探究課題ようになってしまったこともうかがえた。あらためて6つの課題を見直すと、どれも深めようと思えばいくらでも深められてしまう、つまり終わりの見えない問いばかりである。もちろん、そういう問いだからこそ面白く、取り組みがよいがある。しかし、その分生徒にとって1回分の負荷が教員の想定以上に大きくなりがちである。実際、オンライン学習支援の形態に関するアンケートに「質問機能は負担が大きと感じた」と回答した生徒は、続けて「特に公民は考え始めると止まらない、奥が深すぎる」と書いている。考えることが面白いと感じられるような課題を出すことは、適切な負荷で生徒の学習状況を組織化することとジレンマの関係にある。

また、第4節に述べた事例と同様に、オンデマンド型では、生徒のコンスタントな学習ペースをつくることはできなかったと思われる。家庭内で端末が不足しがちだった4月の状況をふまえて小課題の提出期間にゆとりをもたせたが、締切直前に提出されたものも多かった。大半の生徒が間に合っている以上悪いことではないのだが、学校の授業のように規則的な学習習慣の代替は困難だったといえる。

8 社会科授業への示唆

オンライン授業・オンライン学習支援の取り組みは、単にやむをえず行う時間の埋め合わせではなく、新たなツールに対する生徒・教員の認識を深め、ふだんの授業を捉え直すきっかけを与えてくれる経験であった。本校社会科では、オンライン実施された第47回教育研究会において、公開授業に加えて、休校・分散登校期間中のオンライン学習支援の経験から得られた知見を報告した。以下でその一部をまとめる。

- ・教室では声の大きい生徒が前面に出がちだが、フォームやホワイトボードアプリの活用により全体の意見分布を見える化できる。
- ・チャット欄へのコメントは、議論の足跡を細部まで共有して保存できるという点では、教室での議論よりも優れている。
- ・Zoom などを使う場合、チャットの議論だけでは教室での議論より浅くなりがちだが、考えたことを文章で共有させる（相互閲覧可）と、教室以上に深い思考を促す。
- ・高度に抽象的な内容や論理を緻密に追う展開をする授業の場合、行間を考えながら繰り返し視聴できるオンデマンドの動画配信は学習効果が高い。
- ・オンラインでの提出課題は、教室では不十分になりがち「じっくり考えて表現する」という活動を促す可能性がある。
- ・他の授業も含め、課題の総量が多すぎて生徒が精神的ゆとりをなくすと、それ自体がどんなに面白い課題でも、考える楽しみを得られない取り組みになってしまう。

これらは、休校期間以前の教室での授業において、意識されないままであった改善の視点を示している。たとえば、教室で議論が盛り上がると教員は「うまくいった」という実感を得やすいが、実は教室の座席配置などの事情で議論に関与しにくい生徒がいたり、議論の足跡が全生徒に共有されていなかったりすることがしばしばあるのではないかと。また、そこで様々な意見が飛び交う中で、本当に思考は深まったのだろうか。テンポよく発言するだけでなく、「じっくり考えて表現する」活動を保障できていたのだろうか。このような観点から、従来の授業のあり方について、大いに反省するところがあった。

このような授業者にとっての新たな課題のいくつか

は、オンライン授業・オンライン学習支援で用いたICTツールを教室でも活用することで解決できる。たとえば、Google Forms などのアンケートツール、全員で書き込みができて出てきた意見の全体像を視覚的に把握できるJamboardなどのホワイトボードアプリなどが助けになるだろう。

また、「じっくり考えて表現する」機会を保障することについては、今後も提出課題などをうまく活用していく必要がある。ただし、提出課題が授業外の時間に自ら進めるものである以上、オンライン学習と同様に、生徒のモチベーションをいかに高められるかをもっと意識しなくてはならない。たとえば、自分が取り組んだ内容を教員だけでなく他の生徒にも見てもらい、すぐに反応をもらえる、などの仕掛けが有効な場面があるだろう。それは紙媒体では困難であり、ICTツールを活用することで実現される。

9 おわりに

休校期間中は、学校がオンライン授業を求められる一方で、YouTube などネット上で手軽に入手できる様々な授業代替コンテンツに注目が集まった。学校からの支援が不足する場合は、生徒にとってこれらのコンテンツが学習の中心になっていたケースも少なくないただろう。この事態は、公教育の授業がその特権性を失い、その他多くのコンテンツと同列に置かれて比較される状況をもたらした可能性がある。

もっとも、その状況は潜在的にはずっと以前から徐々に進行していたものともいえる。これからの学校の授業は、教室で多くの生徒が集まって授業を受ける意味は何か、学校の授業にはネットでも手に入るかもしれない「わかりやすい解説」以上の何があるのか、などの問いと向き合いながら展開されることになるだろう。オンライン授業・オンライン学習支援の経験を「その場しのぎ」で終わらせず、その成果を生かして日々の授業をアップデートしていくことが求められている。

【注】

- 1) ライブ配信をしながら聴き手のコメントを表示するツールは存在するが、それらを利用する場合は②同期・双方向型に分類する。